

テレビ教材について



太田 静 樹

テレビ教材は音（音声・音楽・音響）を伴った映像であるという点においては映画と同様であるが、映画のと比較して次の点に劣っていると思われる。すなわち (1) 画面が小さいこと。(2) 映像がまだ粗雑であること。(3) 一方的な受信であること。

しかし反面において、次のような学校テレビの特質を認め、(1) 即時性 (2) 多様性 (3) 指導性、これらをいかに生かしていくかということがテレビ教材の利用において重要なことになるので、以下、これを主に実際の幼児向番組にふれながら考えてみたい。

一、テレビの特質

(1) 即時性。

映画のフィルムはいかに新らしいものでも、すでに過去に作られたものを教師が手中に収めてこれを自由に映写するというものである。ところがテレビは今日テープやフィルムに記録出来るようにな

ったけれども、普通は現実をそのまま直接に伝達するものである。最も偉力を發揮するのは実況中継であり、この即時性には映画もかなわない。もっとも学校番組ではそのようなものは少ないけれども、しかしスタジオの現実をそのまま伝達することにおいて変わりは無い。

(2) 多様性。

テレビはその内容として他の視聽覚的方法のほとんどすべてを含むことが出来る。もちろんテレビで用いられるものは映画でも用いられるが、テレビのように即時的に随意的には出来ない。しかしここで注意すべきことは、多様な利用はしても元のままの迫力、魅力は映像化によって乏しくなるということである。草花一つでも、実物を手にとって自由に見る場合とテレビの映像では大いに異なる。テレビに他のいろいろの教材を利用することは確かにそれだけ内容を豊富にすると言えるのであるが、反面、迫力を欠くということ

問題である。

③ 指導性。

テレビの中に教師が現われることはラジオにおいてもであるが、ラジオでは声だけであり、きく者にとっては想像上の教師となるのであるが、テレビでははっきりと姿を見せる。スタジオそのものが教室の再現のような形をとっており、教師は子どもに接しているつもりで演じている。しかし、どの番組もそうというわけではなく、陰の声として映像を中心に進めていく場合もあるが、普通テレビ教師が現われ中心になって学習を進めるので、その影響は無視出来ない。

二、幼児の想像作用

テレビは視聴せしめればそれで視聴覚教育になるのでなくして幼児がいかにそれを受け入れるか考えなければならない。何を視聴してもウワの空では何にもならない。お話をきいても、そのきき方はいろいろあり、テレビにおいても同様である。故にその受け取り方が問題である。

われわれは現実在(事物・現象)を認識する場合先ず感覚に頼らねばならない。それによってより確実な心像を積み上げていき、より正確な認識に達していくのである。ただきくだけのものが、見るよりかは、いかに貧弱な認識であるかは古来から認められている。故に視聴覚的方法で教材を提供する時は前の経験すなわち前から持っている心像が大いに関係し、それらから新しい像を構成していく

こと、すなわち想像の作用が重要になってくる。また想像の作用は感情、情緒と密接に関連している。視聴覚教材は感情に強く訴える要素を持っているので、このことが想像を豊かにする。テレビのように視聴覚両方に訴えるものは一層そうである。故に想像を生きいきと、より豊かに、正しくしていく為には、いろいろな方法による積極的な活動作用が必要であり、そのような過程において望ましい発達をしていくのである。故に視聴覚的方法において必要なものは視聴者の積極的な活動である。

幼児の記憶力の発達は幼稚園期に入ると共に著るしくなり、有形無形のものについてその再認を喜ぶようになる。これは童話の時期を迎えたということになるが、幼児が過去のいろいろな経験から集積した心像を再生綜合していく楽しみであって、この想像作用が幼児にとっては、知的にも情緒的にも重要な役割を果す。ただしこの想像は主観と客観とはっきり区別したものでなくして、むしろそれが混同されているところに幼児の想像の特色があると云ってよい。したがって想像は空想あるいはそれに近いものになるものであって想像と現実を区別しそれを初めから前提としているものではない。そのことはテレビをみて泣いたり笑ったりしている幼児の態度、言動から明らかである。これをいかにして客観的な科学的な認識に導入していくかについては幼児・児童教育において重要なことであるが、心理学的な研究によれば、その時期が小学校低・中学年頃でありとされている。幼児期においてはむしろ想像力を空想的で、それ大

いに活躍せしめることが必要とされている。それはそのような想像作用によって幼児は自己の狭い生活行動や規制から解放され、知的情緒的その他諸々の欲求を満足させて楽しむことが出来、その生活内容を豊かにしていくことが出来るからである。

三、想像と映像

テレビの映像は幼児の想像を盛んにし知的にも情緒的にも意志的にも内容を広め高めていくだろうか。かえって映像が幼児の自由な想像を制約することも考えねばならない。例えば、ある音楽をラジオで聞いた時にはその情景や歌手を自由に想像して楽しんでいたのに、同じ音楽をテレビの演出では、美しく見えない風景写真や振付舞踊にその想像をすっかり壊されてしまったということがある。また前にラジオで評判のよかったお話がテレビで演出せられたことがあったが、それも演出が拙かったせいか、ラジオによるお話のリズム快感は壊されてしまった。これらはテレビの画面が小さく全体的な表現がじゅうぶんに出来ずまた色彩的な表現も出来ず、その雰囲気をかもし出すことがむずかしい。テレビの映像がかならずしも想像を自由にし興味的なものにしないということである。

しかし映像化がいかにことばの説明を助けるか、またそれ以上の表現をするかということも認めなければならぬ。ラジオのお話の理解調査で、どうしてもことばの意味がわからなかったということがあり、またその心像がいかに不明瞭で断片的で不安定であるかが

わかった。これも映像で見れば容易に、かつ正確に出来たであろう。人形の顔や動作一つが多言を費してもむずかしい微妙な表現を示すこともある。結局テレビの映像による表現の適・不適、難易があるわけである。

四、豊かな内容

テレビは映画のような表現になってもラジオのような音中心の構成になっても困るのであってテレビの即時性、多様性、指導性を發揮する為には、テレビ的言語と言われる表現方法をそれに適したように用いなければならない。

即時性といっても学校番組では実況中継やニュースを伝えるということは余りなくて、むしろスタジオ・セットでの生鮮な現実を伝えることである。例えば、金魚の話の時に金魚の絵よりかは水漕の実写の方がはるかに幼児をひきつけたし、また理科番組で、めだかの孵化したてのところを顕微鏡で見せたこともある。それにもまして教師の生きいきとした指導ぶりなどである。教師の実演の生鮮さをそのまま映像化しなければ学校番組は子どもに強く訴えないし、すぐ飽きられるだろう。内容の説明・展開はその教師によるわけであるから、それは一方的な指導であるけれども、子どもを引きつける魅力と話し方の巧さを持つことが必要である。幼児番組にテレビのおばさんが出てくるのがあるが、優しそうな甘え一言話しかけてみたくなるようなおばさんの番組は、幼児も好きなようである。その

番組に興味をもたせ引きつけるのに教師の指導性は力大きい。しかしテレビがその特質を發揮する為には、スタジオや教師の限界を越えなければならぬ。それは多種多様な教材を利用し映像として編集することである。多くの教材はそのままスタジオで利用出来るが、スタジオに持ち来せないものはフィルムとして利用出来る。映画がフィルムの編集から成り立つ教材であることは言うまでもないし、ラジオも今日はテープによって編集されることが非常に多く、しかもそれによってラジオの特質をいよいよ高めている。テレビについても一時に多くのカメラを使用し、また種々なカメラを使って場面を変化せしめるのも編集の一つであるが、また随時フィルムや他の教材を入れることはテレビをスタジオから解放して時間的にも空間的にも自由に編集出来るのである。例えば、金魚のお話の時に金魚の実写や映画から次に紙芝居の話になり、次にリズム遊びの実況というように多種な内容が編集出来るのである。このようにテレビの内容が豊かに編集出来るということは、視聴覚的方法の第一義的な狙いが経験を豊かにすることにあることと合致しているのである。

五、単純化と迫真性

しかしその際、注意すべきことは内容が多様な程よいというのではなくして、むしろ反対に、幼児の理解の立場からは単純化が要求されることである。多様な内容は変化のおもしろさを追うのでなくし

て、それもあるけれども、理解の為の多角的な迫り方であることを主に考えるべきである。それによって短時間の能率的な学習効果を期待しているのである。幼児は興味の持続も学習意欲も長くは考えられないので、変化や動きによるおもしろさは必要なものであるけれども、そこに話の筋の理解ということ、したがってまた幼児の想像をじゅうぶんに展開させることを考えなくてはならない。学級の教師自らのお話は子どもの顔色をいちいちみて、その反応を確かめながら、早くも、おそくも進めていくことが出来るが、それでもその内容は単純な方がよいとされている。それは幼児がまだ複雑な内容は理解出来ないということもあるが、幼児が愛するのは単純な話のリズミックな展開であるということであり、幼児は何回でも自分で想像出来ることを楽しんでるのである。だから遠足の話のテレビで、動物たちの動きにつれてたくさんの遠足の注意事項を並べたてたが、結局、幼児の心に残ったものは動物同志がケンカしておもしろかったということだけだった。また蟬の話のテレビで、ある番組は、蟬取りに行く時は帽子をかぶってというテーマだけでおもしろく引きつけたのに対して、ある番組は蟬の話や蟬のまねの遊戯や紙芝居やらで、ばく然と終ってしまった。

次に話の内容が時間的に次々に変化していくことはやはり幼児の理解をむずかしいものにする。例えば前の金魚の話でスタジオの金魚の実写から次に紙芝居の金魚のお話になり、さらにその金魚の夢の話になり、また元に順々に戻ってくるのである。このように現

在、過去、空想の世界へと自由に往復出来るのは多くの教材を利用すればこそであるが、その変化が幼児にじゅうぶんついていけないものであっては、結局幼児自身の想像がうまく展開しないということであり、それは、わからないしおもしろくないということである。

故にテレビの内容は多すぎても時の変化が急すぎても、幼児には重要な点を強調することも思い出させることも出来ないものである。

次に多様な教材の利用は元のものより迫力を欠くと前に言ったが、その代りに多教材の利用によって事物現象を分解的総合的系統的に示すことが出来るのである。例えば、ちょうや蟬の一生を紙芝居的に見せたりするものである。またお月見の番組の月は余り感じが出ないけれども、月の満ちかけの天体写真や、その実験的、図解的説明はテレビならではのものである。なお、テレビの映像に不可欠の音の効果はその迫真性を強調するものである。音だけでも幼児にすばらしい影響を与えることは、すでにラジオによって認められているところであるが、ましてテレビにおいては映像そのものに、あるいは映像の背景となり、あるいは陰の声となってそれを強力に進めていくのである。テレビの迫真性はどんな映像の場合にも求められるのでなくしてその目的内容に応じて考えられねばならない。

六、受 動 性

次にテレビを受け入れる幼児について考えなければならないのであるが、それについて一言付加するならば、よく問題にされてきた

ことは、視聴するということはお話をきくことと同じく受動的、消極的なものである。むしろ教育的に好ましくないということである。もちろん、視聴ということは目的的な直接経験とは異なるけれども、その能動性、受動性はその形にあるのでなくしてその内実にある。ラジオをきいてもそうである。調査の結果によっても、きいたラジオのお話をかんとんに羅列する者から想像を過去の経験からいろいろ働かしてラジオの話以上に複雑にまとめようとする者まで多くの段階があることがわかった。おそらくテレビ視聴においても同様であろう。それを一概に受動的であるとはきめられない。それでもなお、坐ったまま視聴していることに対して受動的であると言うならば、幼児の胸ときめかし手足動かして視聴している様はまさに活動的であり、それは後の活動にまで関連して発展しそれだけで終るものではない。三匹の小豚のテレビをみてその劇化活動が相当長く続けられたこともその一例である。

なお、これに関係したことでNHKの調査によってもテレビを熱心に視聴する児童は学力も秀れているという報告があり、またこれは英国の例であるが、熱心なテレビ視聴者は学校生活におけるいろいろな活動において決して消極的でないという報告もされている。これらのことはおそらく幼児にもあてはまるのではないかと思われるが、どうであろうか。要するに、テレビの積極的な利用の為に番組についてはもちろん、子どもの反応についても、もっと詳しく研究されねばならない。